



ロンドン大学ゲートの飾り

ロンドン日記



宮井 敏

×月×日 バスに乗っていると珍らしくインスペクターが検札に来た。ロンドンの二階建バスは徹底した信用制度の上に立っているからごまかす気になればいくらでもごまかせるわけである。車掌が廻って来て切符を切ってくれるのはどことも同じことであるが、その切符が均一料金になっていない上に、おりにしなに集札しないからその気になればただ乗りはいくらでもということになる。K大の老教授で「さすがは紳士の国」と三嘆していた人があったが、どうもこれはだいぶピントはずれの感想のような気がする。

ロンドン児はそれほど甘くはないから車掌が廻って来れば近い距離の停留所の名をあげて適当に切符を買い、廻って来なければお金は払わないでそのままバイバイという人がかなりいる。交通局はそれを知ってか知らずにか、時々思い出したようにインスペクターを乗せて検札してはいるが、見ているとほとんど実効はない。赤字に悩む市当局がまさか高い犠牲を払って「あくまでも人を信ずることの尊さ」を教育する気はないだろうから、結局これは公共事業としての「やる気」が全くないからだということになりはせぬか。イギ

リスがすでに紳士の国でなくなったのかどうかの議論はさておき、とつくに意味を失っている制度を根本的にかえようとは少しもしないのだから：。

それにしてもこのバスの二階へ上がる時は苦勞する。急なステップをうっかりミニ・スカートのあとから登ろうものなら大変。見上げると眼がつぶれる。

×月×日 日本人商社の集まりで学園紛争の話をせよという。遠く離れていればそれだけ気がかりなのであろうか、熱心な質疑応答がくり返えされた。雑談に移ってから、この国ではいったいどうなのか、という話になった。

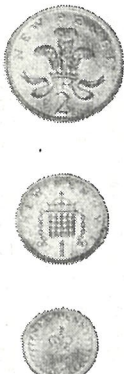
ソルボンヌでの分裂さわぎから海を渡ってやって来てオグゼンフォールドをつくり、さらにまた喧嘩別れしてカンテブリジを建てた十三世紀の昔はいざ知らずこは昔から大学生のあまり騒がないところらしい。一般にはその原因を国民性のせいだとか、全寮制のお蔭だとかいろいろ言うが、決定的には学生数が少ないからだとおもう。変ないい方だが学園紛争が起きるほどにまだ近代化が始まってい

ないのである。一昨日の新聞に連合王国で四十九番目になる大学の開学が報じられていたが、全体の数でもその程度。大学への進学率となるとトルコの次ぐらいにしかない国のことである。エリート教育から市民教育へと大学教育の目標をうつしかえて、時代の要請に応えようとそれなりに努力はしているのであろうが、なにぶんにも社会の階層的可動性がほとんどない上に、およそ急激な変化を本能的に忌避するお国柄もあって、そう一朝一夕には体質改善がのぞめないわけである。

たしかに学生運動そのものはそれほど低調なわけではなく、反戦デモはしょつ中トラファルガー広場でくり返されているのであるが大学当局に対する活発な学生側からの要求ということになる。ほとんど組織的な動きはなく、そうした意味での学園紛争が始まるのは「まだ数十年も先の事でしょう」と言ったロンドン大学のP教授のむしろ淋しげな表情を思い出す。だから量的に拡大した教育現象の矛盾の解決という点から言うならば、この国のやり方はほとんど日本の参考にならない。もつともそのイギリスへわざわざ高い金を使って大学教育制度調査に来る同志社人もいる

のだからおめでたい限りではある。右顧左べんしないで自分たちのことはあくまでも自分たちの手で解決しようとする姿勢がなければ駄目だ。

×月×日 この間のBBCからの放送に講演料を送って来た。見れば何と一〇ギニとある。書画骨董の売買や、医師、弁護士、謝礼にギニ単位（一ポンド一シル、すなわち一五二ペンス）が残っているとは承知していたが公共機関の内部でさえ、まだこんなふうに使われているとは意外であった。いま政府はよくやく重い腰を上げて、長い間の一ポンドが二十シルで二四〇ペンスというややこしい制度をこのさい全廃して十進法の貨幣単位に切り替えるべく、試験的に新五ペンス貨と新十ペンス貨を平行して発行している。だから財布の中には、ハーフ・クラウン（二シル半）、フーリン（二四ペンス）、同価の一〇ニューペンス貨、一シル自銅貨、同価格の五ニューペ



英国の新通貨

ス、十二角形の六ペンス貨、スレプンスと呼ばれる三ペンス貨、一ペニー銅貨、ヘイパニーという半ペニー貨の九種類が入っていることになり、かりに三シル半のタクシー料金に対して一割のチップを計算してその相当額の硬貨をつまみ出すということになるとまさにコンピュータ的な能力が必要なのである。元来このギニー金貨は一八一三年以来は鑄造停止ものの本には書いてあるのに、おおよそ一世紀半経ってもまだ単位として残っていることを思うと、かりに新百ペンスが一ポンドとして切替っても、このギニー単位だけは従来の価格通り一ギニは新一〇五ペンスとしてまだまだ使われて行きそうな気がする。

×月×日 昨日大学のかえりにチェルシーの日本人クラブへ寄つたら、支配人のOさんから「君原選手と高橋監督が来英して明日のウィンザー・マラソンに出場するので応援してほしい」と頼まれていたので、今日は朝から出かけることにする。

在留邦人はみなゴールになっているポートランド・プレイスへ行ったのであろうか、出発点には日本人は誰もいない。お城の大手前

でまらかまえていると、来た来た。いつもの生真面目な表情の君原選手が先頭集団の四、五位あたりを矢のように坂下へ駆け去って行った。「頑張れ！」と叫んだ声が聞えたのであろうか、一瞬目の前をかすめて行ったユニフォームの胸の日の丸が目にしみるようであった。あとでラジオのニュースを聞いているとやはり予想通り一着でゴール・インしていた。

×月×日 今日はいーリングにある工業大に併設されている英語学校を見て来た。千葉大や東京外大にある日本語学校と同じように、外国人留学生に対して指定大学に入学する前に、半ば強制的に英語教育を受けさせる施設である。この種の学校としては一ばん早くランゲージ・ラボを採用したということだが、設備の点ではどう見ても大したものではない。ただ羨ましいのはクラス・サイズの点で今だに徹底した小人数教育を行なっているから、その点では効果もめざましいものがあるだろう。おまけに英語が常にまわりで話されているという日常の生活環境に助けられているから、日本のように学習動機もあまりは

つきりしない受講者を、しかも大量に処理しなければならぬケースとではちよつと比較にならない感じである。同席したヘルシンキ大学のL教授はしきりに感心していたが、需要の急激な増大と弱電メーカーの過当競争からし施設が急速に発達した日本の教育工学の現状からみれば、参考になるようなものは残念ながら一つもない。もっとも事情にくりい学長クラスの先生方は視察の途中この程度の施設を見せられて、「わが校にもぜひ」と言ったことであらうし、語学の先生ですら全国的な教育工学の水準をつかんでいない人が多いからきつと手ばなしではめて来たのではなからうか。

×月×日 日本から届いた英訳「花伝書」の初版本を大英博物館へ寄贈しに行ったらおつそろしく莊重な受取りをくれた。「女王陛下の命により、その僕なる館長サー何々は下記の手書がブリティッシュ・ミュージアムの書庫に加えられたことをよろこびをもってお知らせする」とある。ここのリーディング・ルームは蔵書数六〇〇万冊、いまだに世界一を誇っているが、分類方法は旧態依然たるア

ルフアベット方式でおまけにカード・システムになっていないから馴れるまでは四苦八苦する。閲覧室の座席番号Gの7というのが伝説ではマルクスがいつも坐っていたということになっており、日本人留学生はよくこの席に坐って写真をとって貰ったりしているが、本当はマルクス在世当時と今とは建物が変わっているで今のGセブンのシートは何のゆかりもないわけである。マルクスはこのミュージアムヘトテナムコート・ロードをこえたところにあるソーホー街の下宿から通っていたというが、その下宿屋は今クオ・ヴァディスというレストランになっている。時おり彼はソーホー街を下ってシャフツベリ街からピカデリーサーカスをこえたところにあるレッド・ライオンというパブ（居酒屋）へ出かけてビター（苦ビール）を半パイントばかり飲むのをたのしみにしていたというが、このパブは当時から労働組合の集会などによく使われたりしていたということである。おかみさんのローザ・アンセルの話では建物はおよそ二百年ぐらいになるだろうというが、経営者はたびたび変わっているのでカール・マルクスの話もあり御存知ない。今はBBCの連中が

たむろしていることが多いようである。

×月×日 ウォルター・レッシング氏の招待でペル・メル街のリフォームクラブへゆくレッシング氏は女流作家のドリス・レッシング女史の弟にあたる人である。正面を入ると昔ながらの赤い制服半ズボンの従僕が立つて



走る君原選手—ウインザー・マラソン

いる。創立二百年ぐらいというのがクラブ員であつた何人かの宰相の胸像が薄暗い回廊にずらりとならんでいる。トウリイ党から今の保守党につながるカールトン・クラブというのがこの先にあるが、それとならんで英国史を裏側から書いて来たわけである。このクラブは定員五百人、欠員がないと入会できず、また一人でも会員の反対があると駄目になる仕組みで、談話室には十何人かの候補の名前が張り出してある。「何年かかっても入れないのじゃないか」というとレッシング氏片目をつぶつて「なに、冬になると上のほうはバタバタと逝くからな」とニヤリと笑つた。ロースト・ビーフにヨークシャ・ハム、マッシュルームのポターージュ、まずロンドンでは最高クラスのcockというが、たいしてうまいものではない。

×月×日 キングズ・ヘッドというパブのカレシというビターがばかに口にあうのでまたぞろ出かけてゆく。半パイントで一シルペンズ（約五〇円ほど）。やすいものである。ここはむかし「さるプリンス・オブ・ウェルズが夜な夜なおしのびで」見えたという伝

説があるのだが、なにぶん「さる皇太子」だから確めようもなく、いわば言い放題みたいなものだが、それでも何となくそんなこともあつたらうか、と思わせるような雰囲気はある。何げなくオーストラリアの民謡のマチルダを口ずさんでいたら、親爺のボールドウィンのとつつあんが「それそれ、そいつをやつてくれ！」といわれて、とうとううろおぼえの三番までを歌わされる破目になった。去年訪れたオーストラリアの街まちの風物があざやかに眼前にうかび上がつて来る。そう言えば今朝のオックスフォード街はひどい霧だつた。ロンドンもあと何日。北の都でうたう南の海の歌は心なしか霧でしめつて、それだけにまた太陽と牧場の国の想い出をひとしおいきいきとよみがえらせるようであつた。

（商学部教授・英語）



岡山県下の同志社人



瀬戸大橋完成予想図

更井良夫

岡山県に若い人材が躍動しているのは当然のこと。この高度成長の県下経済界で発展している若い同志社人の群をまず紹介する。

＊

岡山駅の前に豪壮な九階のビル、岡山会館の社長の赤沢胖（大経中退）は若い実業界のリーダーの一人で推薦された校友である。ホテル・ニューオカヤマやデパート、グリル、名店街や貸室も沢山ある岡山の顔であるビルの経営者である。県下の中部・北部のバス路線を独占する中鉄バス社長・藤田正蔵（大経二七年）もバス会社の翼下に中鉄スパー、蒜山観光、中国タクシー、互栄興業を持ち多角経営の敏腕を振るっているし、その会社一本木四郎（大経九）以下数名の校友が頑張っている。岡山日産の常務取締役・鈴木嘉吉（高商七）と岡山自動車工業の社長・井上正之（大経八）も本県自動車産業の一方の雄で堅実に脚光を浴びる仕事に精進している。

建設業では地元岡山では一流の松本組の実力者・荻山勇（経專一九）が多くの土建工事に顔を出している。宇治産業専務取締役・宇治正和（大社二三）、平和塗装社長・伊勢田泰男（高商一七）、繊維の杉本商事の専務取

経済企画庁の新全国総合開発計画により、岡山県は中国四国の中核となり、瀬戸内海経済圏の中心的役割りを果すよう期待され、未来の明るい見通しに県民は覚悟を新たにして躍進を続けつつあります。

三年後の三月には完成する山陽新幹線の終着駅岡山から東京には四時間、二年後の今頃には、中国縦貫自動車道が吹田から本県の落合まで貫通し、京都から二時間余で当地まで走破できるし、この三月には最終決定される

という本州四国連絡橋のルート決定も、その工事費も、工事期間も経済性も、技術的優位性も最良の瀬戸大橋が、岡山の児島から香川の坂出まで島をまたいで十三分で渡れる世紀の大工事が敢行される。倉敷の水島臨海工業地帯は全国の新産業都市の優等生で、今日、この地帯に四十余の日本の代表的な大企業がそのたくましい生産成績をあげ、十年前まで農業県だったのを工業県にあざやかに脱皮して県民所得の倍増を他に先んじて成功させた

締役の杉本浩一郎（大法三六）と常務の弟・博章（大法三八）のコンビで父親を助けて業界に雄飛している。寝具、カーテン、家具等で岡山一の老舗山根フトン店社長・山根藤策（大法二三）もカッチリ昔からの信用を確保している。戦後数年に異常な膨張をした万成病院（精神科）の常務理事で、岡山青年商工会議所理事長・小林稔（大経二八）は口八丁手八丁で海外まで飛び歩いて布哇寮出身の真面目を発揮し、当地の話題を賑わしている。戦後飄然として出現しゲンゲン県下を席捲している岡山一の電気器具の店ヤナイの社長・柳井恵蔵（大経九）は夫人・百合子（女専英文科）と長男・繁弥（大経三五）を専務取締役として同志社人らしい良心的な手腕で県民の全幅の信頼の上に、いよいよ社業は発展している。岡山で美津屋（喫茶と洋菓子）の名を知らぬものはない。その御曹子・妹尾完一（大商三三）は白帽白衣で第一線で指揮し、サービス最高の名をあげている。昔からスポーツ界の信用第一位の竹波運動具店社長・竹波一夫（高商一五）、婦人に魅力ある高級呉服店津乃国屋の専務・岩根勝彦（大商三六）も一流なれば、紳士服と服地の古い店角丸堂本

店社長・佐藤久雄（高商一六）も一流専門店である。この佐藤、岩根、竹波、柳井、杉本、山路、妹尾の七人は共に表筋繁華街に店舗を並べて同志社人の誇としてよい。山路順吉（大政七）は美術商岡山画廊社長としての道の三十年、この地方文化に貢献している。

変ったところで柔道七段・高商柔道部首将だった小合源太郎（高商八）が岡山大学や高校で柔道師範を勤めながら自宅では整骨院を開業し、門前市をなす盛況。かつては同志社出身の有名な牧師、上代知新・金森通倫・安部磯雄・安部清蔵・田崎健作・鈴木浩二らが岡山伝道はなやか宣教成績をあげたが戦後はどうもパツとしないのはなぜか、母校にたずねたいところ。

* *

瀬戸内海経済時代の県政推進の舞台上に踊り出ている二人の校友、一は自民党の上野謙吉（大経四）他は社会党の谷啓介（大経二九）。上野は古い校友は記憶される同志社ラグビーの黄金時代の選手で、そのスクラムとタックルのわざよろしく今日も保守陣営の四期生の重鎮で母校の名譽をになう紳士である谷村はよい対照で、母校時代はゼンガクレン県議一

期生の彼は正義漢として些少の不義不正汚職を許さない審判者として議会壇上より叱罵して恐れられている。その前一期は岡山市会議員として奮闘し「一匹狼」と称された実績をもっている。

県庁の中堅クラスには校友は多い。係長クラス以上に、霜野正夫（高商一八）、土井幹人（中一八）、阿部順吉（専法一七）、久山貞志（大経二〇）、末広恵一（工専二三）、野谷伸夫（大商三五）その他これらに続く若い人々は沢山いる。岡山市役所では福祉事務所長の近高雄（大政一三）が代表で、数名が頑張っている。地方公務員でも同志社出身者は他の俗物と異なる品位の感ぜられるのはうれい。みんなのおのの職場で信望を得ていることはもちろんである。ただ教育界では数多くの校友・同窓がいて数え切れないが、校長・教頭クラスには見当たらないのは残念である。ジャーナリズムでは地方紙の雄、山陽新聞社に山崎徳吉（外専二三）、守谷時夫（経専二三）、安東稔夫（大社二六）、若狭宗孝（大経二六）、亀川光雄（大商三五）、榮英裕（大経三八）、下村侃（大社二七）その他数名の事件記者、経済記者、政治記者として張

り切つて健筆をふるっている。夕刊岡山社には大久保正泰（大経一七）が健闘し、NHKには村田敏雄（高商一〇）がいる。JETROの赤木保之（大文三五）は岡山の物産を海外に輸出するのに東奔西走している優秀な岡山県のセールスマンで、海外旅行で日を暮している。

これが岡山地区で同志社人として自他共に認め校友会や同志社クラブに出席する人々である。

*

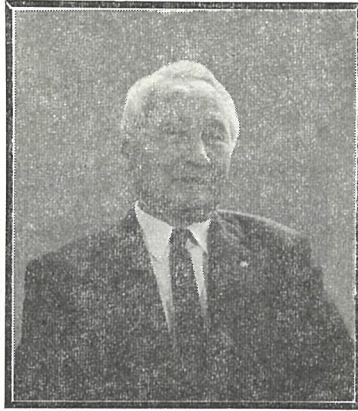
津山地区には木村繁樹（高商一三）とその弟が美作地区の石油ガソリンの総御商、木村商会の社長で県北の代表的実業家である。

倉敷地区で竹中光（女専英文科大正五）の名を知らぬ者は少ない。四十余年竹中幼稚園長として幼児教育に献身され、一昨年、藍綬褒章を贈られ、多くの教え子に祝福されたことは同窓にとってうれしいことであった。同窓会支部（支部長更井美子・女専英七）に登録される卒業生は二百余名だが竹中がその名のごとく光を放っている。他はことごとく良妻賢母でそれぞれ家庭婦人であると讃えてよからう。倉敷国際ホテルの取締役・秋山幸夫

（大経一三）は倉敷より出向しているエリート。泰西名画で有名な大原美術館の副館長・松尾静雄（大経一三）の大原コレクションの説明は優秀なもの。全国のハエ取紙やスプレ一の七割を生産するカモキの社長・鴨井邦夫（大経二九）、備中地区の三菱石油の総代理店赤沢商会の取締役・吉川正（大経三一）もこれらの誇る人材だが、もう一人倉敷には名物男と称するより偉才と呼ばれる河上文久（大政三〇）がいる。大衆食堂自由軒の社長で、岡山タウナス・クラブ会長。八日間内地無停車日本一周旅行や蒸気機関車十七時間連続添乗とか、日本全国の駅入場券コレクションのレコード・ホルダーはもちろん愉快な称号だが、このサムライ文久さん未完成タクトに酔うと題して昨年十二月十五日号の毎日グラフィにグラビア七頁にわたる紙上を御覧なさい。花々しく彼は第六回目の東京交響楽団を去る十一月二十六日、日比谷公会堂にて指揮し、シュベルトの未完成、プロコフィエフのピーターと狼、チャイコフスキーの悲愴など、プロのオーケストラを素人のラーメン屋の文久が東京の桧舞台でタクトを振って万場の聴衆の喝采を博したんだからとんだドンキ

ホーテである。昭和四十一年十月十日岡山市公会堂でも有料の公演会で東京交響楽団を指揮し、ベートーベンのエグモント序曲。モーツアルトのピアノ協奏曲20番二短調。チャイコフスキー交響曲6番「悲愴」を小沢征爾も顔負けのはげしい身ぶりで行ったの、NHKの時の人、週刊新潮、週刊朝日、週間文春（四十一年十月三十一日号）にもトップのグラフィ四頁にわたり勇ましい姿の写真が出ている）を騒がした傑作か怪物である。在学中グリークラブのマネージャーやコンダクターをしていて卒業後十年にして如斯。アキレカエル校友であり、この童顔と稚氣と野心と自信は同志社は誇ってバック・アップして欲しい人物。この男近く個展を開くために油絵の制作にいそしんでいるとか、何を仕出かすか判らない。最後の数行の余白を埋める責任で恥づかしいが自分（大神八）のことを遺憾しながら書くと、同志社校友会岡山支部長で社会福祉法人岡山博愛会理事長。精神薄弱者終身愛護施設もその学園理事長。学校法人梅花学園常務理事。財団法人岡山県血液配給センター理事長等その他あれやこれやであるが略す。

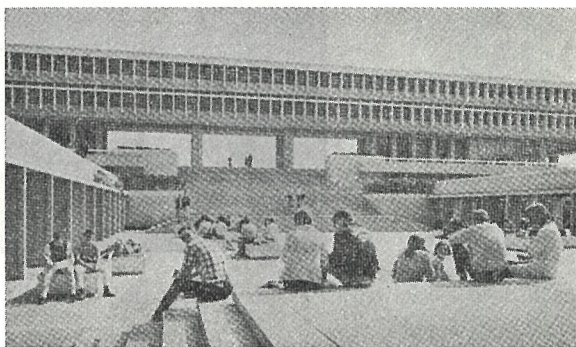
（牧師）



石川 芳次郎氏略歴

- 1881（明治14）年11月5日 東京都に生まれる。
- 1904（明治37）年 同志社普通学校を卒業。
- 1910（明治43）年 京都大学工学部を卒業、京都電灯株式会社に入社。
- 1827（昭和2）年—1951（昭和26）年
同志社理事・同志社評議員。
- 1929（昭和4）年—1938（昭和13）年
同志社校友会会長（第18代）
- 1941（昭和16）年 京都電灯副社長に就任。
- 1943（昭和18）年 京福電鉄社長に就任。
- 1947（昭和22）年 紺綬褒章を受章。
- 1950（昭和25）年4月—同年6月
同志社総長事務代行。
- 1951年—1959年 同志社監事。
- 1958（昭和33）年 藍綬褒章を受章。
- 1959（昭和34）年 京福電鉄会長に就任。
- 1963（昭和38）年6月 日本真空技術株式会社社長に就任。
- 1964（昭和39）年 勲四等瑞宝章を受章。
- 1965（昭和40）年 京都市名誉市民となる。
- 1965年11月29日 同志社大学名誉文化博士。
- 1969年1月17日 心筋こうそくのため死去、87才。
- 2月2日 京都市公葬（同志社栄光館）

雪 の 中 の 青 春



Simon Fraser Univ.

馬 場 伸 也

三月。日本では桜の蕾がふくらみはじめ、窓からは春の日差しが、一年間の授業を終えひっそりと静まり返った教室をゆるやかに暖めはじめ。四回生は例年なら就職先もほとんど決定し——今年度は特に激しかった学生運動のため、事情は多少異なるかも知れないが社会への門出に胸をふくらませ、懐しい学舎

を巣立んとしている頃
と思われる。

けれども北国カナダ
(北緯42—80度)では
野山はいまだすつかり
雪に閉ざされ、窓から
はさらさらと美しく輝
く樹氷が見られ、外気
の平均気温は摂氏零度
前後、ひとくちに言っ
て雪と氷に鎖ざされた
生活。カナダの大学生
活はそうした環境のも
とに営まれている。大
半の大学が日本の北端
稚内より北に位置して
いる。そうした日本と

は全く自然環境を異にした世界の中で操り広
げられる営みをまず御想像願いたい。三月は
どこの大学でも学期末。教授も学生も最後の
追い打ちに拍車をかけている。

四月の初旬に期末考査があり、中旬から下
旬にかけて、ちょうど草花が雪の下から青い
芽をふきはじめる頃、学生たちも長らくとじ

こめられていた学舎から春に向っていつせいに飛び出して行く。そして長い夏休み(五月から九月中旬まで)を経て、九月下旬に各大学はまた新学期を迎えることになる。この五月近くもある夏休みに、日本の皆様は驚かれるかも知れない。しかしカナダでは、そうする意義と、またそうしなくてはならない必要性がある。長い夏休みの意義は、雪のない美しい木々とすみきった河湖に恵まれた大地に自己を開放して、来るべき長い冬の学業のため心身を鍛えること。その必要の一つは、大半の学生が両親の援助を借りず、授業料その他の大学生生活費を自己負担するため、夏季休暇を農園や工場の手伝い、ボーイスカウトのような青少年の野外指導、水泳場その他避暑地の番人等のアルバイトにあてねばならないこと。その二は、実際問題として、学生はもちろんのこと、教授たち自身、いな誰れ的心をも長い雪から開放された時には、屋内にとどめて置くことは不可能であると言うことにある。

*

カナダの人口は約二千万。これに対し、高等教育機関(専門学校・短大等を含む)は約

四百、うち正規の四年制総合大学は約百校程度ある。ただし総合大学数は基準の置き方によって多少の相異がある。大学生総数は約二十万、うち外人留学生五パーセントの一万八千程度で百五十カ国から集まつて来ている。

カナダの教育行政は各州の自治により営まれている結果 (The North America Act of 1867, Section 93) 国家全体としての一貫した大学制度、行政といったものは存在しない。

州によつては、六・三・三制の上に大学を設けているところ、六・三・四制、七・三・三制、八・四制等とまちまちだが、本来基本としては八・四制の上に大学を設けるという趣旨になっている。加えて、多くの大学(殊に東部の古い州では)が元来プロテスタント或はローマンカトリックの諸教会をバックに建てられた私学である關係上、立学の精神も運営方針もそれぞれ異つて特色があり、生徒は自己の希望にしたがつてかなり自由に大学を選振することができる。入学は生徒の高等学校の成績と推薦状で決定される大学がほとんどだが、なかには進学適性検査のような試験を採用している大学もある。しかしまた逆

に高等学校を出ていなくても一流大学に仮入学を許可され、一学年の成績さえよければ、本入学を許されるといった自由なところもある。

カナダは地理的氣候的關係上、北米合衆国より人の住みつきにくい(因に合衆国の人口は約三百六十七万六千平方マイルの土地に二億。これに対しカナダは三百八十五万二千平方マイルの土地に二千万人。したがって人口密度は合衆国の十分の一に満たない)移民の奨励や高等教育機関への導入といったような人的資源の開発にどの州も大いに力を入れているので、大学生をガッシリしめるという制度を採っている。もちろんカナダにもいわゆる「有名大学」(マギル大学、トロント大学、ブリティッシュコロンビア大学等)は若干あるが、日本のように学生が狭き門をめざして入試地獄にさいなまれるといったことはなく、また卒業後の就職昇進等もすべて本人の能力次第という立て前が社会全体の意識の中に浸透している。

カナダの大学行政から日本が学ぶべき一つの重要な点は、連邦政府、州政府の各大学に対する経済援助である。カナダの大学はそ

の大半が私学だが、その学校経営費のうち生徒の授業料によつてまかなわるのはわずかに二五パーセントで、連邦政府の各校負担は平均二二・三パーセント、州政府の負担額三九・八パーセントという比率になっている。すなわち、連邦・州政府の私立大学への援助は合計して、各大学の全運営費の六二パーセントにもなる。日本では、政府が憲法第八十九条などを理由に私学経費の国庫負担を認めない結果、私学は毎年経営難、授業料値上げ問題に悩まされている。学生運動の一端もそうした点に起因することを認識する時、日本政府の反省と熟考が望まれる。これは同志社大学では田畑忍先生が常々主張されていることでもある。

他にカナダの大学の特異性として、授業が英語とフランス語の二カ国で行なわれていることがあげられる。これはカナダ連邦政府がこれら二国語を「カナダの国語」と定めているためである。主にプロテスタント系大学は英語で、カトリック系大学はフランス語で授業がなされている。なかには一校で両国語を併用している大学もかなりある。カナダは全人口の約七〇パーセントがイギリス系または

フランス系人種で占められ、二者の比率は英八に対し仏五・五となっている。

＊

以前に述べたごとく、学期が雪の降りはじめる頃から解けるまでの約六カ月間に限られている結果、たいいてい大学が通年制を採用している。したがって授業はフルコースの場合はこの六カ月間で終了する。なかにはハーフコースもあり、この場合は前期（九月中旬―一月上旬）に授業を終了し、一月の中・下旬に試験が、あるいは後期（二月から四月）に授業を受け試験という仕組みになっている。フルコースはたいいてい週三時間で、学生は一学期に五コースから七コースとっている。最近アメリカの多くの大学が三期制ないし四期制（夏期も含む）を採用し、学生は一学期に三―五コース程度とるのは若干異なり、カナダの制度はむしろ日本の大学のそれに類似している。試験制度も通年のコースなら年二度または期末考査とペーパー程度で、学生は比較的自由に勉強をエンジョイしているようだ。私の友人でアメリカのある大学で自然科学を学んだ人が、『アメリカの大学は大学院生をも、まるで小学生のように扱う。毎週小

宿題、クイズ、ペーパー、中間考査、定期考査と何かと研究の成果をテストされ、学生の自主性が全く認められない。』とこぼしていたことがあるが、カナダではそのようなことはない。といってヨーロッパの大学のように研究はほとんど全面的に学生の自主性にゆだねられるというのでもない。ちょうどヨーロッパとアメリカの中間を行くと言った形だがこの「中間性」は、大学のみならずカナダの文化全体についてもいえることで、大学のそうした傾向はアメリカ文化とイギリス・フランス的ヨーロッパ文化合流の一形態的表現とも言いうる。

学生が教授に対して非常に礼儀正しい点でもカナダの大学生はアメリカの大学生と異なる。講義中に質問したり反対意見を述べる時は必ず「サー」と言って手を上げる。教授のオフィスに入ってくる時その他の立居振舞が礼儀正しいのには、二年間アメリカの大学で教え、生徒たちからまるで友達あつたいを受けていた私には最初大いに驚かされた。両者とも敬語の少ない同じ英語を話しながら、どうしてこれ程ニュアンスが違うのかと、時々不思議に思うのだが、これは要するに言語

の表現上の問題ではなく、その奥にある相手に接する心の持ち方の違いではないかと思われる。

この問題も大学生の態度だけに限らず、カナダの社会的人間関係とアメリカのそれとの相異全体からくる一派生と見るべきだろう。どちらが生徒で、どちらが先生だかわからないアメリカの大学は、そのままアメリカの家庭での親子関係を反映していることができる。その点カナダではまだ健全な家庭が社会のユニットとして残っており、こうした家庭から来る学生は大学でも教授と良い意味での「師弟関係」を結ぶことになる。アメリカでは教授と学生、親と子、夫と妻等あらゆる人的関係が自己的利害を中心とした個と核の集離に還元されてしまっている。

カナダの大学生は一般に（この点はアメリカの大学生も同様）非常に真剣に勉強する。一コースにつき教科書教冊の他参考書もどしどし読み、どしどし質問し、ディスカッションするといった態度である。

雪と氷の中で、学生たちは授業時間以外の時間をどのように過しているのだろうか。学生たちは、いったん朝学校に来ると最後の授

業が終るまで、途中休み時間があつてもたいてい学校に居残り、図書館で本を読むか、学生会館で友人たちと話して次の授業を待つてゐる。一つには雪が三〇センチから一メートルもつもっている道を往復するのがめんどろうだという心理が学生たちを読書家にするのだらうが。したがって平常は一日中学校にいて、夕方……といっても日暮の早いカナダではすっかりあたりが暗くなって、月あかりに照らされた白い道を学生たちは下宿へ、寮へ、フラタニティーへ、あるいはソロリティーへと急ぐ。自宅通学者は比較的少ない。

暖かい食事と若い仲間とのはずんだ会話が彼らの冷えきった身体をほぐす。歓談ののちまた勉強につくもの、大学でのさまざまな催しに、デート(女子学生)をさそつて出かける者等その行動はまちまち。大学での催しには音楽会、劇、映画会、講演会、フアッシュンショーまである。これらありとあらゆる催しが学生の手で行なわれるが、これも零下二十度前後の雪路を遠い町まででかけなくても良いように工夫されたものである。週末にはビールやコココーラ、ポテトチップス等の簡単なスナックでダンスパーティーやワイルド

パーティー等、エネルギーを発散させ、若さを満喫する方法を心得ている。近くの山や湖にスキーやスケートにでかける連中もある。

学生間いかなカナダ人全体にもっとも人気のあるスポーツはなんといってもアイスホッケー。各大学対抗、フラタニティー対抗等では血潮をもやす。

*

最後にカナダの学生運動に一言ふれておかねばならない。カナダでも世界的風潮にもれず学生運動は大いに盛んである。闘争問題は各大学、地方によつてまちまちだが、政治問題ではやはりベトナム戦争反対のデモンストレーションが最も大きく、次いで特にケベックでは、いわゆるバイリンガリズムの問題

(フランス語と英語を公式国語とする：がこの核心)をめぐるフランス語系学生と英語系学生の対立。バイアフラの飢餓にひんする人々に政府はもつと積極的に救援すべきであると政府建物前でのシットイン。その他ソビエトのチェコ侵入に対する抗議デモ等がある。

カトリック系の大学では宗教的色彩をなくして普通の大学にすべきだというようなデモもある。しかしこの大学でも政治問題より

もいわゆる学校行政への「参加」問題が多く、学生の要求は、教授会を公開にすべし。教授会への生徒代表の参加を認むべし。学長を公選にし、生徒の選挙参加を認むべし、等々問題はさまざま。ケベックではフランス語系専門学校が完全に学生に占拠された例もある。しかし一般にはカナダの学生運動は日本ほど過激ではない。

以上カナダの学生生活についてペンのおもむくままに書きとめてみた。

日曜日の午後。窓の外は一面の銀世界。樹氷に反射する太陽の光は目がくらむほど明るい。澄み切った大気は針の光のように鋭い。

(昭34大法卒・マギル大学助教)

最後に一つお願いがあります。私の学生(カナダ人、良く出来る信頼のおける人間)で日本の美学、文学に興味を持っている学生がいるのですが、交換条件に英語を教えることとしてスポンサーをさがしています。夏休みだけでも良いそうです。連絡は私の所までして下さい。よろしく願ひします。

99 BISHOP POWER
#302 VILLE LASALLE,
QUEBEC, CANADA

福吉での生活

犬飼光博

昨年の十二月二十一日NHKテレビの「あ
る人生」で「筑豊の青春」という題のもとに
僕の福吉での生活が紹介された。

放送後、全国各地からたくさん励ましの手
紙を受け取った。僕の生活を深く知っている
人からは「もっとつっこんで欲しかった」と
いう感想があり、初めての人からは「感動し
た」との便りであった。

僕の生活は決して人前に見せるようなもの
ではない。だから「感動した」などと言われ
ると何んとも恥ずかしい気持がする。そし
てその「感動」の内容を知って、今度は腹立
たしく思うことすらある。

でも、夜間高校に、働きながら通い、自分
の人生はこれでもいいのだろうかと思んでいる
人や、人のためと思ってやったことが、人に

理解されず、そのため事業に失敗して、今は
自分の生活のことではいっばいだけれど何ん
とか人のために尽したいと考えている人、ある
いは受験勉強の無意味さの中で、ふと一生と
は何かを考えさせられた人、そんな人々から
の励ましの手紙を読むと、全く何んの取得も
ない僕の生活だけれど、神様が用い給う時に
何かをなすのだと思わずにおれない。

ところで、そんな僕でももう福吉に住んで
四年近く、いろんな体験を通して勉強させて
もらった。そして、本当のところ何が問題な
のかも少しづつわかって来たように思う。ま
だまだ体系も何もないけれど、同じような働
きをしている同労者とは大いに語り合っ
て見たい問題がいっぱい。

当然なこととは言え、テレビではそんな問

題は取り扱ってもらえない。だから、あの放
送が終ったあとの僕の気持は、やっぱり自分
で書かなければダメ、直接話さなければダメ
だ、ということであった。

そんな僕のある意味での失望に光を与えて
くれた手紙があった。あのテレビを見てよく
も、このような感想を書いて下さったものだ
と心からうれしく思う。そしてマスコミはダ
メだというけれど、マスコミが扱うのは人間
だし、マスコミを扱っているのも人間、それ
を見たり聞いたり読んだりするのも人間であ
って見れば、その人間同志、立つべき場所に
立ち、なすべきことをなしていればおのずか
ら通じ合えるのではないか、そんな気持すら
する。

それは、炭坑の人々の苦しみが理解できな
いという僕の悩みの中で得た解決でもある。
苦しみという苦しみをなめつくし、悲惨とい
う悲慘を経験して来られたおじさんやおばさ
んの中で、聖書を共に学んでみて、もし体験
が聖書研究の必要条件であるならば、僕はこ
こでは聖書研究ができないと思った。おじさ
んやおばさんの重い重い過去は、僕の軽い過
去をたじたじさせる。結局のところ、同じ合

うことはできないのではないか、そんな思いがしたものだ。

その思いから完全に解放されたわけではないが、過去をそんな形で問題にするのではなく前へ向って問題にしなければならぬことを知らされた時、そして、どんな体験をしたかではなくて、その体験をどれだけ誠実にしたかが、最後のところでは問題になることを知らされた時、過去の鎖から真に解放して下さる主、誠実であらしめ給う主を中心にする時人間的にはいかに不可能に見えてもここでの聖書研究もまた祝福あふれるものになることを知らされた。

マスコミの持つ障害をのり越えて理解し合える場所があるとすれば、まさに、同じ主に贖われたことを喜び、感謝している者同志でしかあり得ないのではないか。

＊

その手紙はこんな風に書かれていた。(原文はひらがなばかりのタイプであったが必要に応じて漢字になおした)

主に在りて敬愛する犬養さん！

四年前、樫原の新年聖書講習会でお目に

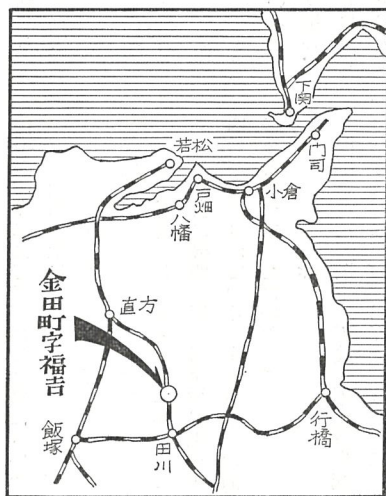
かった山下です。一年に一度の「ヨシユアと共に」に掲載されるあなたの福音での御活躍に目を見張っておりましたが、今度、テレビに出たあなたの御姿を見て、いままだ傍観者のにあなたのなさることをながめていた私が大変恥ずかしくなり、遅ればせながらここにあなたのお仕事に声援を送る一人に加えさせていたどうかとこのお手紙を書いて(打って?) いる次第です。

あなたが「ヨシユアと共に」に書いておられるように、このあいだのテレビに出た情景——あなたが町長選挙の候補者に質問するとある酔っぱらいの男がさかんにそ

の質問にくだを巻いた場面——は私の皮相な(浅薄な)見方かも知れませんが、福音の最も根本的な問題をえぐり出しているように思いました。あなたは言われる「福音吉をこのような事態にしたものに對しては、徹底的に戦わねばならぬ。それはそうだ。しかし、それを糾弾する人、その人の罪の問題はどうするのだ」と。それに対して人は言う「あの搾取的な資本家

どものあくどさに比べりや、わしらの方は物の数ではない。そうかたく言わんでもよかじやないですか？」と。

あのくだを巻いているおじさんは、かんぐれば作戦的に候補者に頼まれてやっていたのかも知れませんが、素直に受け取ればあなたの質問に胸を突き刺されたことは間違いないさうですね。たとえば、あなたの言うことに言葉の上で反駁できても、やはりそれが何んの支えにもならぬことを隠すわけにはゆかないわけです。それがあのようなわけのわからぬ態度に出てくるのでしょうか。さっぱりと反対



＊ 福吉は福岡県金田町にある。

する横着さも無いかわり、自分の心のねじまがりにもはつきりした勇氣もないというのが大部分の人間の姿のようですね。それがもつとも鋭く生活にたちあらわれる福音でああなたが戦っておられることを、人々が理解するには大変時間がかかりそうですね。いやそんな理解などあてにしていたんじゃ、この仕事はできない、とあなたは言われそうです。

ところで、あなたが「ヨシユアと共に」に書いておられる中で、私の注意をひいた箇所が二つあります。一つは「お金は温い人格を通してしか分配されてはならない」であり、いま一つは「一番おそろしいのは、現代の人は不正とか不義に対して非常に寛容であることだ」でした。特に後の方には私自身、自分の裁判という仕事を通して痛感しておるのです。もつともあなたの言っておられることを私が十分に理解していないかも知れませんが、私は裁判を通じて、日本人ってどうしてこんなに寛容なのだろうと思うことが少くありません。極端に言えば、お互いに相手の不正、誤魔化^{ごまか}しなどを大目に見ながら、その釣合の上で事を運んでいくというやり方を大変好んでいるのです。これを調和といい、また

相互信頼というわけです。これを批判するのは嫌われ、仲間はづれになることを覚悟しなければなりません。ただ私が思うのはこれから先です。これらを裁くことと同時に何をなすべきかということです。キリスト教会は裁くことによって理解者を失なうことを恐れ罪の問題を避けて通ることにしているようです。その結果ますます甘く見られているようですが、罪を指摘することによって反抗し、離反して行く者をどうするか、ほうておいて良いとは決して言えないと思いますが、犬養さんはきつと福音でこの問題に汗水を流しておられると思います。私の観念的な問題などには遠くの昔にそれなりのお考えをお持ちだと思いますが、私はこの問題こそ、イエスの「十字架」そのものではないかと思っております。

テレビであなたがダンブカーのハンドルを握っておられるのを拝見した時、正直のところ、私はのんきにテレビであなたのお仕事を眺めている自分が恥しくなりませんでした。いろいろまだ書きたいことがあります、お忙しいあなたのお仕事の邪魔にならないようにこれでやめます。同封のものはあなたのお

仕事のお役にたてただければさいわいです。お仕事の上に、また御家庭の上に、主のお守りがありますよう祈ってやみません。

(注 手紙の中に「ヨシユアと共に」とあるのは、高橋三郎先生を中心に作られているヨシユア会の機関で年一回発行、現在までに四号が発行されている。僕も筑豊での活動報告を書かせていただいた。)

*

提出された問題——不義・不正を指摘しなければならぬのは当然であるが、このことによって反抗し、離反する人たちをどうするか——はまさに僕の福音での最大の問題である。

山下さんの期待に反して僕はこの問題に対する明確な答を得ていない。ただそんな僕に福音書に描かれているイエス様の姿がますますあざやかに浮んで来ることだけは確かだ。不正や不義や罪と一步も妥協することなく、しかも不正や不義や罪の横行している社会や人の中で温かく生活しておられるイエス様の姿をだ。それは僕の体験とは全く違う。生活保護の問題を話し合った時も、失業対策事業に出ている人々が働かないといった時も、福



福吉の保育園の子どもたち

吉の人々との間の溝の深さを感じさせられたものだ。

分離と反抗を起さしめないような伝道は無いと思う。しかしそれは悲しいことなのだ。福音書のイエス様の姿はその温かさを最後の最後まで確保しながら、しかし、やっぱり分離と反抗のうずの中で結局十字架への道を

歩まれたのであった。

そのお姿に見はれてみると、山下さんの言われるように、分離し、反抗する人々を最後の最後まで愛し抜き、しかも、そうしながら結局分離と反抗のうずの中で消えて行くことが僕の使命であることがはつきりする。それ以外の道は考えられない。

ただ、この道は側から見ればあるいは悲壮に見えるかも知れないが、その内容は決して悲壮なものではなく、「感謝」であることを知っていただきたい。分離し、反抗する人々を最後の最後まで愛し抜けるのは、自分自身が幾度となく分離し、反抗しつづけたにもかかわらず、神様が一方的に最後の最後まで愛し抜いて下さることより、許されて生きるものとされたことに対する「感謝」にあるのだ。

「筑豊へどうして来られたのですか」と最初に聞かれたら、僕は、高橋三郎先生のテープをこの福音で聞かせていただき、それが僕の新しい人生のきっかけになったこと、この新しい人生がどれほど祝福に満たされたものであったかを語り、それらすべてに対する「感謝」が僕をここで生活させているのですと語ることにしている。

他の多くの人々のように、炭坑の人々は悲惨だからという理由で来たのでもなければ、底辺こそは明日のキリスト教を荷う何かを持つていて、それから学ばなければならない、という気持で来たわけでもない。あるいは筑豊を現代日本資本主義の最大の矛盾としてとらえ社会変革の砦しようと思って来たわけでもない。

ただ「感謝」なのだ。

僕は福音でこの「感謝」を生活している。聖書を共に学ぶことがその最大の表現であるが、僕の生活全体をかけて感謝している。

僕の感謝が、福音や筑豊の人々にとって決してありがたいものでないことを十分承知している。それでも僕は与えられた持ち場での感謝を献げたいのだ。

(昭和37大神卒・牧師)

